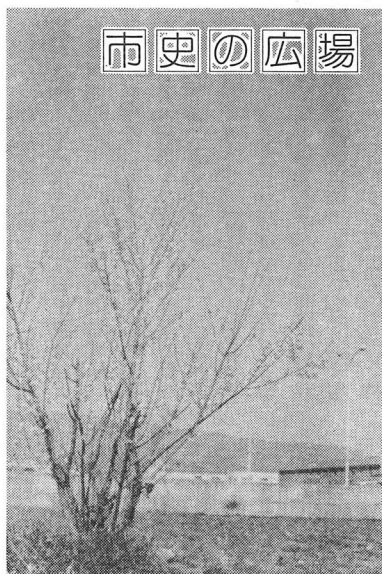




姫見塚跡に残る桜の木立

姫見塚と国母

樋口光治

都市化が急速に進みビジネス文化の奔流に生活と心をとらえられている。これが近代都市市民の姿ともいえる。戦後四〇年、かつて、ひなびた国母地区も時の推移に体質はすっかり変化した。無統制の住宅増加と人口の増加が人間模様を多様化し、隣は何をする人ぞ、至言が互いに心にこたえる。この傾向の中に漸く熟年層にも若い世

代の人達にも、故郷国母の床しさと歴史の価値観に関心をよせる向きが多くなり、「国母地区故郷づくり運動」に拍車となつて、全国に稀な地名『国母』の発祥と歴史の解明を望む声が盛りあがってきた。国母地区地史研究会はこれに応えて努力し、国母地区に古くから伝わる姫見塚と染殿後の伝説や、国母の由来を次の様にまとめた。

その一部をここに紹介することとする。

姫見塚の位置

県道甲府市川線で千秋橋を経て二キロ、国母七丁目で甲府バイパスとその交差点にいたる。交差点の南側の歩道を東に約二〇〇米歩いた右手の自動車修理工場の脇の田園の畦の上に僅かに残っている桜の一株がある。そこが姫見塚の中心だったと言ひ伝えられている。

終戦前まではこの辺り一帯は見渡す限りの田園で、春は菜種の花、レンゲの花で絨綴を敷きつめた様な詩情をただよわせていた。桜で表徴された姫見塚は昭和初期頃までは、まだ相当広い場所ので、春の彼岸頃ともなれば桜が美事に咲き誇り、付近の人達が花を愛でながら昔物語に興じた由緒とロマンの憩いの場所であった。

(一) この桜は染井吉野とか能成寺吉野ではなく、山桜系統の種類である。花は一重で小さく、京都吉野の伝来の山桜と同じと伝承されている。桜の大樹は時の移りかわりにより附近一帯が農地化されたため衰えたが古株が名残をとどめ、現在は萌芽で育

った二・三本の小枝に今年も花をつけていた。この桜の大樹の実在について旧日本陸軍陸地測量部発行の五千分の一の地図に独立樹潤（葉樹）として記号で位置が示されている。

清和天皇の母君・染殿后にまつわる姫見塚の資料

『甲斐国志』巻之四十四、古蹟部第七、巨摩郡中郡筋に昔時の「国母」の郷について次のように記載されている。

国母郷。又云此所ハ染殿后ノ御領ニテ時人国母ノ郷ト呼シ故ニ稻積国母地蔵ト称スルナリト（染殿后ハ忠仁公ノ女 文徳ノ后 清和ノ母故ニ国母ト称ス。日本記略ニ昌泰二年己未五月廿二日甲寅大皇太后藤原原子崩年七十三号染徳太后或云フ同三年崩）按ニ稻積庄ノ内ナリ。国母ノ郷名ハ他書ニ所見ナシ疑ラクハ慈母ノ義ヲ云ナルベシ（傍・印筆者）

右の内容について、国母地区に古くより伝えられている古老の話題などをもとにして国母地区地史研究会の会員が地区内旧家に伝わる古文書を探り、併せて稻積国母地蔵の旧蹟を中心として日輪山法城寺跡を探

査、更に東光寺と京都花園の法金剛院のつながりを調査した。以下その内容を簡単に説明したい。

旧中巨摩郡国母村上条新居（現在は甲府市国母八丁目）に現存する姫見塚が染殿后の遺跡である事が古来からの伝承伝説また幾多の古文書などを参考として浮かびあがってくる。

此の附近一帯は地名を姫見塚と総称され制度上の小字名となっている。その中心に塚があり周辺に蓮池その他の池沼が点在し、塚の中央に桜木の大樹が永い歴史を象徴していた。即ち、国母文協の地史研究部が古上条町の旧家窪田郁雄氏方から発見した宝暦年間の絵図には、上条新居村の中に小字名を姫見塚と称し半径約二〇〇米程の地積が表示されており、その中央に桜の大木のある丸塚が記載されている。往昔以来ここを郷土のシンボルとして附近住民は篤い信仰と平安朝の国母と仰がれた染殿后の遺跡と敬信し続けて来ている。それが永年に及ぶ地域の変ぼうと近代農業構造の農地拡充の時代の波に浸透され、次第に僅かの面積となってしまった。

(2) 甲府市役所、固定資産台帳記載甲

府市上条新居町村後一三四七番地地目、原野。地積一六平方米（昭和五七年四月調査）

国母染殿后のご領地国母の郷について

山梨県立図書館所蔵の『甲斐州稻積国母地蔵靈験記』によると、

本朝イマタ三十三ヶ国ニシテ五幾七道モ不定當時行基菩薩彼ノ甲斐国之地形ヲ見給イケレハ凡ソ四岳八峰立囲ミテ瑞雲常ニ起覆テ像似千宝形内凹ナリサレバ富貴之相ヲ示メツイニ仏法繁昌之靈地爰ニ妙也

と感じ篠原の丘の東麓に庵を結び湿地干拓の事業を念願し多くの神々、農民の協力を得たと謂われ亦た他書によると行基は養老元年四月布教を禁じられ都を放逐され諸国行脚に出、養老二年戊午三月甲斐国に来り篠原丘にて地蔵菩薩の化身の大法師の啓示を受け、山紫水明の甲斐国々中盆地の開田に志した。それは僧侶たる者は技術・工芸、曆数などの知識をもち、それを実際に役立てなければならぬという、五明の思想に基づくものとし、この活動に協力する豪族

や農民の力を広く結集して河を拓き道や橋をつくり、池、溝、樋などを開いて農業を起した。農民は喜び、秋になって稲が実ると稲束を積んで豊作を祝い、人々はこの地を稲積の郷となえたと謂われる。行基のこの事業が達成される頃、あたかも政府は

山梨医専の空襲―忘れられた遺体―

柿 島 弁 隆

かつて戦時下において、甲府に山梨医学専門学校（山梨医専）が、引き続き山梨女子医学専門学校（山梨女子医専）が設置されました。

当時の医専希望者は非常に多く、倍率も高く、入学は至難のわざでした。両校とも校舎は、青沼にあった甲府商業学校があられました。

昭和二〇年七月六日の夜、甲府は空襲に見舞われ、山梨医専の校舎も焼失いたしました。山梨医専は二回の入学生がありましたが、山梨女子医専は甲府空襲の前日七月五日が、第一回目の入学式であったため、一日も学ばずして校舎を失い、女性教師一

三世一身法を定めるなどして、治水、開田政策を積極的に進めていたので、おそらく行基は甲斐国稲積郷一带を中央政府の政策に相応するような方向で実り豊かな土地にしていっただけと思われる。

（市史編さん調査協力員）

人と学生一人が亡くなっております。

この二人の犠牲者とは別に、山梨医専には解剖学の実験に使われるため、全国から集められた多くの遺体が保管されておりましたが、これらも当夜の空襲で校舎とともに焼けてしまいました。

この多くの遺体のほとんどが氏名・年齢・職業・前歴不詳の方々で、書類上は「大気望氏外二四体」、また「死体保存状態不明」としかわかっておりません。

昭和二十一年一〇月二五日、その後関係者によって処理を終え、当山仏国寺（相生三丁目八―五）の無縁墓地に、山梨県総務部の方々によって懇ろに埋骨されました。

当山に埋骨された理由は、父が戦時中に甲府商業学校で教鞭をとっていたことがあったためと思われます。

その後昭和二十六年一月一日、山梨県知事天野久氏によって永代供養のお願いがあり、志納金が納められております。

この話を知るきっかけとなったのは、何年前か。それまでずっと寺の年中行事として供養してきたこの無縁墓地周辺の整地中に、多数のお骨が出てきたことから、それまで私が思っていた以上に広い無縁墓地について、父母から私なりにきいていた話の確認のため、寺の古い書類を調べた結果わかったことです。そのためこの墓地周辺は手をつけず、そのまま現在にいたっています。

山梨医専、同女子医専ともに、昭和二十三年三月をもって廃校となって、在籍していた学生達は、希望により東大附属医専、東京女子医専、名古屋医専に転入した方々もあり、医学をはじめ、それぞれの分野で活躍されております。

戦後四〇年県民待望の山梨医科大学と附属病院が設置され、県民のために非常に役立つ現在の現在、空襲による犠牲者の名簿